

勢山文書 ③「おさしづ」の写し翻刻

おやさと研究所員
安井 幹夫 Mikio Yasui

(2) 明治三拾三年三月十六日 内山の材木地所買入れノ御願
さあへ尋る事情へ 何事も尋にやわからん 何ほとへの
理かうつる とおく処 かれこれ心はこびよふでくれにやなら
ん 又一ツ だいそれへは受取んへ 三ツ三だん壹ツこせ
んで よふ聞わけ そこで年限天ねんへといふ なによふも
ちいてくれ 是さとして したに手をおゝいてつたへてくれ
たいそふ受とれん とこみてもきれいとゆう みくるしいとゆう
理八人二へ二受取ありても 天に受とれん 是聞わけ 立
木一条八十分はこんで いそいでこふてくれ 此理天年でなり
たつたる あの立木何ほどの金もちて とふしよふで 出来な
んだもの ふるい事情二さとしたるへ自由用とゆうへ い
そいでかいとるがよい

(注) 正文と対照するとき、抜けている文が多い。おそらく本部
の用紙と思われることから、書き取りの一部と推測される。

(3) 明治三拾八年三月四日 初席相濟後 居宅ノ台所ニテ教
長様初メ梅谷山中飯降氏モおりし処へ増野氏二十年祭祭場の絵
図面を□閣下様へ御伺イ夫レへ協議之折柄にわかには刻限の御
さしづ

今度ハ内々みなおふきい心になれ なにがのふなつてもかまわ
ん おゝきな心二なつて この事まちてへまちかねていた
あとわ大きな事二なる 何も心二かける事いらん みなへ心
配をせいへ しんはいわたのしみの種となるほどに 一粒ま
んはいとゆう事ハ もふとふからへさとしおいたるほどに

(注) これも本部の用紙に書かれたものと思われる。

これより冊子になっているものを順次翻刻していくことにする。

(4) 無題

(ア) 明治廿年五月廿五日 刻限 夜十時廿分 東京ニ於テ普
通教会御免被下ルヤ御伺

さあへどふゆう事 ちいさいへへ さあへ手をかへし
なかへ 御ちそふ二しなおかけるなら かげのそなへ ぜん
なまゝのまゝでハあじがない あじがない者ハいかんものよ
猶しんバいの事であるふ まことお神にそなへるなら かげん
さして あじわいお見て 宝をそなへてくれ

(イ) 全年五月廿六日 午後四時四十分

ちよとはなし ひとかたならん事にもしんじつ尋ねバ しんじ
つをもちてしらしておく

天理の命と称するげん」(1オ)

ゆうハ元ない人間ない世界をこしらへた神である さあ神の社
ニ成る事ハ 小さい百姓ヨリ百姓の家へきたものである さあ
へ学問した糸らいものというてハなし たゞなんにもしらぬ
おなご壹人やで 皆一めいでより あちらにもこちらにも た
いぶんにひろまりきたる事やで いづれみなへ此道二およふ
事であるそや 此したいを しつかり聞き届て まことお定メ
てふみをとる事ならバ とんなほそい道があるふとも とんな
なんしゆうな処とてもきつと とふれる事である

(ウ) 明治廿年五月廿八日 午後八時 刻限」(1ウ)

さあへいかなる一ツの事情 そふじ一条 すつきりそふじし
てしもうで みなかたづけたか どふでもみなそふじしてしま
うから すまからすまゝでそふじ一ツの道ハあらため そふじ
のどぶぐも入 又かたづける道具も入 納める道具も入 ふき

そふじする道具も入 いつもそふじやどちらもちらもちらそふじ
や すみへまでもそふじや どふゆう処 心のそふじや さ
あへあとの道をあらため なかいでない 今まで聞いているで
あるふ わからん 一寸ふきとる わからん 是から心次第や
今迄の道いかなる 聞わけ またへ 里一ツすぐみへる と
ちらへくるやら まこと一ツ 里を聞き訊ねバならん あんし
んの道も有 さあへ又見へてくるで」(2オ)

さあへさきへうつしてある よふ聞わけ 真実まこと八道
の道 しつかり定メ 心を納メ しつかり納メ しつかり納
は一ツの心定メの道 定メの心 いつまでもしつかりとふんば
れ まこと定メる一ツの理 道の道とふす しつかりと定メが
第一やでへ」(2ウ)

(エ) 明治廿一年二月十日 午後十時

さあへいちへに一ツ尋る処 さあへとふゆふものである
ふとおもうへ しつかり聞わけ すゞやかあらためて 一ツ
の理のある身の処 すみやかなもの どふゆうものと思う 心わ
理とちかう 一ツの理をさづける時といふ者ハまこと一ツの心で
さづかるやろふ なにかの処むつかしい事ハゆわん やらこい
一ツのはなし 一ツの理である むつかしいことハゆわんで

(オ) 明治廿一年六月五日 午後十時

さあへいかなる処 身上いかなる処 たすねる しらす身
上」(3オ)

一ツのみとあり いかなる処 さあへはやく身上一時咄し
是さきへにまいよ此道くだり さあへとんな咄しもしかけ
て有 一寸今一時尋ねだす はやくとふし まあ一寸はしめか
ける とんな道もはしめ わからん さあへそれよりなるな
らん 是まで一寸はなしつたへる よるへでゝ咄し一ツ は
なしへあちらこちらみのがし 今一時世界の事情運ぶ わか
らん 上下わからん いつへいふでハない いづれ一ツ
たんへ□から 刻限くるなら道のどふりつれてとうらねバな
らん またへ処をかへる処 ま事の処 はやくもとめよ い
かなる道もわかるであるふ やれへといふもあるふ 一ツ□
ま一ツはやくはこぶねがならん なん」(3ウ)

でもならん日から刻限はづさんよふ 神一条の道である は
やくへいそぎとりかゝれ さあへ一寸はじめかけたら たん
へ理をきかそ めんへさとり 一ツ心もはしめねバならん
聞わけ わからん 天理王の命 名称ひろめかけ 一ツの事情
とちらの理 重々の理よふ聞わけるよふしやん 世界まゝ ばん
じ一ツの事情 わかるわからん おゝくの中 神一条ならバは
かりがたく一ツの道 是が十分たしかなミち しやん第一なら
ん いろいろまでひろまるで みがしいハならんといふ い
かなる処 人間一条の理でハはかりかたない はやいもので
ある はやくとりかへし神一条」(4オ)

(注) (4) の (ア) ~ (オ) までの「おさしづ」は、正冊に記
載なし。おそらく次号に掲載する (カ) も同様かと思われる。
正冊に記載されない「おさしづ」が、このようにいく
つもある、というのは、今までの状況からいえばげずらし
い。文の口調も正冊のものとは若干違うような感触がある。
その意味で、このまま「おさしづ」と同一視してよいもの
かどうか。あるいは新資料なのか。悩ましいところである。
今後の検討が必要であろう。ただ教理史の研究資料という
ことで、このまま掲載を続けていくことにする。